

大熊信行著

『經濟本質論』（配分と均衡）

板垣與一

ひとり經濟學とは限らずひろく社會科學の理論的研究にたづさはるほどの者は、社會生活のあらゆる歴史的形態にも拘らず、それを超えて自己を貫徹するところの本質法則の發見へ驅り立てられるのを感じるに相違ない。

あらゆる現實の錯綜せる諸問題が一樣にそこから導き出され、且つそこへ投げ返へされるところの根本理念の探究の魅力は執拗にわれわれを捉へて離さぬものがある。

本書の著者はかゝる意味での本質法則乃至根本理念を經濟理論の中に求めて『配分原理』と名づける。配分原理を確立し展開する科學的作業がとりもなほさずこゝにいはゆる『經濟本質論』の主要課題をなすものでなければならぬ。

配分原理を確立する方法として、著者は何よりも先づ『學史的・體系的方法』に據る。先人の遺された業績を個別的にくまなく點檢し、古典を新なる光のもとに映し出し、それに新なる生命を吹き込む卓れた手腕と確かな手法ほど讀者をして爽快を覺えしむるものはない。こゝにスミス、ゴッセン、カッセル、マルクスが最も多く取り上げられ細部にわたつて徹底的な分析のメスが加へられてゐる。『近代經濟學の諸體系はいづれの學派たるを問はず配分原理の脊柱なしには形成され得ない』といふのが著者の到達した根本的確信である。

そこで先づ明らかにされなければならないことは『配分』の意味内容の規定である。そこに於て著者の指示せんと努めたことは、第一に配分は『ゴッセンの第二法則にいはゆる種々なる目的への資力のふりあて』といふ意味であり、第二に生活上の諸目的の充足が單に現在のみならず、將來にわたつて複雑多岐を極むるところから、これらの云はゞ『意欲の體系』の二次元的構造が經濟配分の過程を通して綜合統一せられ、第三にそれと關

聯して經濟配分は資力の諸量を一定の比例に於て合理的に配分する意味をもつところから均衡原理に關する一切の思想を含むといふことである。配分觀念は均衡原理と結びつかずしては『經濟實踐の基本形式』としての本來の意義を獲得することができず、配分法則とは『配分均衡の法則』でなければならぬ。

さて著者の主張する配分學說の根本觀念の最も特徴的な性格は、『配分均衡』の概念が單に現在の(空間的)のみならず將來的(時間的)に把握されてゐること、即ち二次元的に把へられてゐることであらう。『配分均衡』の概念がわけても後者に重點をうつした意味に語られるときこそ本來の面目を發揮すると云ふべきであらう。かくてそれは純粹經濟學に於て云ふところの『交換均衡』の概念とは區別せらるべき意味を取得しなければならぬ。何故なら『交換均衡』はその成立の過程が自由に交換せられた經濟諸量の落着いた相として、云はゞあとを振り向いて見たときに出來た現在の均衡として *station*

geschlafene な均衡とも稱せらるべきものであるのに對して、『配分均衡』は生活目的の多元性を統一しつゝ經濟諸量を適正な比例に於て振り當てようとする將來的均衡として *ent zu schlafende* な均衡とも稱せらるべき意味を含むからである。『交換均衡』にありては經濟諸量の動的過程がすべて自然的メカニズムを通して作用するところから、たとへ經濟者の意志に反して成立した不均衡乃至不比例でも、全體の交換關係から眺められるときは、落着いた諸量の釣合ひとして依然均衡狀態の名を以て呼ばれるであらう。然るに『配分均衡』にありては、配分に於ける均衡を支へるものはそのうらにある『意欲の體系』であるから、生活の全體的統一的意味にかゝはらしめて必要充足の合理性を高めてゆく『厚生原理』たる意義を發揮するものと云ふことができよう。殊に配分の二次元性を強調することは、經濟の合理的理性が常に將來充足への配慮に根ざすといふ基本的事實から自ら明らかなることであり、配分均衡が二次元の構造をもつといふことは充分注意せられてよいであらう。著者が計畫經

濟の原理的研究にとりては配分原理への基本的反省なしには一步も進むことができぬと云はれるのも、かゝる意味を指示せられたものであらう。

次に配分學説のなし遂げた *note* のひとつに數へられねばならぬことは、從來の經濟學説の中に屢々意識されず混濁せる技術概念と經濟概念との限界を確定するといふ點に關して強い光を投じてゐることである。そしてそれが從來の諸學説の中に含まれた配分觀念を析出するといふ著者獨特の作業のうちに自ら果された成果であるといふことも興味を促すことである。この部分に關する著者の分析過程ほど全篇中最も熱を加へ輝やきを帯びてゐる箇所はないであらう。スミス分業論の犀利にして徹底的なる究明がすなはちそれである。

スミスの有名な分業學説は、一工場内の『勞働分制』の組織として生産力増進の技術原理として作用するのみならず、それが一工場内の技術的分業を超えた社會的分業として展開され、諸種の職業乃至生産部門への社會的總勞働の配分均衡として單なる技術原理以上の經濟原理

たる意味を有するものである。それ故スミスの分業論の構想から單に生産力増進のための勞働の組織を意味する技術原理のみしか理解するに過ぎぬ見方は一面的であるといふはねばならぬ。さうしてこの一面的な見方を超えてスミスの本質を看抜かんがためには、スミスが *the natural division and distribution of labour* と記した敘述の深い意味を悟ることなくしては不可能である。かくしてスミスの分業學説の中には『勞働分制』乃至勞働組織の技術原理と國民的生活諸要求の綜合と云ふ意味を含んだ社會的『勞働配分』の經濟原理といふ二重の性格が包有されてゐる。『勞働分制と勞働配分の現象は一方には社會的欲望の多様性にもとづき、他方には社會的技術の必要にもとづいて能動的なものと制約的なものとの綜合として成立し』、この二つの現象はスミス独自の『自然的自由のシステム』のもとにたくみに内面的に結合せしめられてゐるのである。

されば經濟配分の問題は一方に於て技術原理の制約のもとに立つと同時に、それを超えて生活諸要求の綜合乃

至全體的統一を實現するものとして、經濟の本質の深い意味を語るものでなければならぬ。これ著者をして『生命の原理としての配分法則』と呼ばしむる所以であらう。かくして配分の原理は經濟生活に於ける『全體性の原理』を意味し、生活にかゝる具體的なもの一切を貫徹する『經濟實踐の基本形式』として、本來的に『意志的・規範的性格』を有する。配分經濟は意志、經濟でなければならぬ。經濟配分の理論が現世紀の課題たる計畫經濟の基本原理たる地位に擬せられてゐるのも配分原理の發展性と將來性を豫示するものに外ならぬ。

○
かくして本書の主題をなすものは、過去の諸經濟學說のすべてに生きのびた配分觀念を綜合的に解釋し、それが如何に現世紀の經濟的實踐の諸問題に對して基本原理たり得るかの究明にあり、この點において著者の企圖は確かに一貫したあるものを擲んでゐると云つてよい。ただ然しながら全體として本書を見ると、分析の武器として自在に驅使せられた方法そのものについては多少の

疑念なきを得ない。

すなはち著者はあまりにも經濟の『本質規定』をのみ追求せる結果、經濟の『形態規定』とも名づけらるべき方向への用意を輕視せられた憾があるのではなからうか。一切の經濟學說の根柢にあつてこれを貫く本質法則を發見せんとし、現象をそのエレメンタルな姿に於て分析せんとするあまり、配分法則の歴史的形態的妥當の問題に積極的に觸れるところ寧ろ少しとせねばならぬ。方法論的要具としてはあまりにも Robinsonade を重視されてはゐないであらうか。それが『精密法則』の發見のためには欠くべからざる要具なりとするも、かゝる分析の結果が原子論的前提のもとに行はれたかの制約を必然的に背負ふことになりはしないか。もとより著者が Robinsonade の方法論的意義を強調せられた箇所には、一般的規定と特殊的规定との關係につき示唆に富む著者独自の解釋と根據とが明示せられてある。それにも拘らずなほ不敏にして筆者の充分に了解し能はざるところである。それは配分均衡理論の實踐的眞實性に觸れる次の問

題に關するからである。

經濟實踐の基本形式としての經濟配分の問題は、それが實踐的妥當を實現し得んがためには必然的に配分比例の形態的決定の問題にまで進まねばならぬ。そしてその場合何よりも先づ眼を向けねばならぬものは、そこに於て經濟配分が遂行せられるところの『經濟秩序』そのものである。配分原理が如何なる經濟秩序にも拘らず自己を貫徹するところの經濟の基本原理であるといふ意味に於て Grundidee たるに止まることなくして、更にもう一步つき込んで Gestaltidee の問題として配分原理の歴史的形態的妥當の問題が取り上げられるのでなければならぬ。即ち經濟學の理論的研究にあつて常に方法的反省としては『經濟思惟』(Wirtschaftsdenken)と『經濟秩序』(Wirtschaftsordnung)との對應一致を顧慮し、いくつかの『經濟秩序』に對應せるいくつかの『經濟思惟』の形態、理念を聯關的、構造的に統一する意味での根本、理念を把握するのてなければならぬ。すべて『本質論』の課題はかゝる努力の過程を通ることなしには、眞に實踐形

式としての有効性を確保することはできぬと思はれる。

然らばかゝる方法的用意のもとに配分原理を確立するといふ仕事は如何にして成し遂げられるかといふに、それは配分原理を單に學史的・體系的にのみ探究するばかりではなく更にさしあたり經濟史(經濟政策史)的に或ひは歴史形態學的に追跡することを意味しよう。そしてそれが方法的に Stufentheorie, Dialektik, Typologie, Morphologie, Ontologie などのいづれの方向に沿つて展開せらるべきかについてはさまざまな困難な問題を含むであらう。何れにしても著者のいはゆる『自然法則』又は『本質法則』として樹立せられた配分法則は、右に述べた『法則の歴史的形態的妥當』を内に含む意味の法則の觀點に於て把握されねばならぬと思ふ。

更にかく云ふことは著者の經濟配分原理に意志的・規範的性格が賦與せられる場合には一層痛切なるものがある。例へばスミスに於ては自然的自由のシステムのもとに自動的に無意識的に作用するものと見られてゐた勞働配分の自然法則が、そのまゝ技術的制約と生活諸要求と

の綜合を全體的聯關のもとに意識的に配分するところの規範法則として作用せしめられることは、それ自體既に大きな問題を含むものといつてよい。その際この配分法則が計畫經濟配分の原理として、本來的に經濟厚生實現のための法則として、意識的・規範的實踐の原理にまで轉回せしめられるといふことは何を意味せねばならぬであらうか。それは經濟配分の實踐的主體が單なる個人を離れて、家計、企業、國民經濟などといふ統一的な「社會形成體」(ゴットル)へ移りゆくことを物語つてゐると同時に、實踐的經濟主體が現に置かれてゐるところの「經濟秩序」の次元そのものの推移をも物語つてゐると云はねばならぬ。著者が『配分學說が理論的完成をみるためには社會的生產が意識的統制の形態にまで發展してゐなければならぬ』と述べてゐることは、經濟配分の本質的規定は更に經濟秩序との關聯に於ける配分の形態的規定にまで進まねばならぬ所以を告げてゐる。『經濟本質論』は『經濟形態論』と手を携へて始めて充分なる科學的作業能力を發揮し得るものと云はねばならぬ。

— 前號内容 —

非常時局下に於ける輕工業のアイドル・コスト問題	吉田良三
公營企業の減價償却	太田哲三
標準原價の原價能力と其の會計機構	金田實
商業帳簿に關する我が商法の規定に就いて	村瀬玄
セメント市場を繞る二三の問題	中川孫一
ソ聯の石炭資源	佐藤弘
學界展望	
ケインズの「一般的理論」をめぐる論争	鬼頭仁三郎
特殊文獻目錄	
『金マルク會計』文獻目錄	岩田巖

リツケルト著「哲學の根本問題」(大田可夫)。
 雜波田春夫著「國家と經濟」(中山伊知郎)。
 シュンラング「文化哲學の諸問題」(藤井義夫)。